

UMP9は如何にして本当の家族を得たか

瑞雲さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごめんね、UMPG☆

目次

UMP9は如何にして本当の家族を得たか	1
UMP45の気持ちはうれしいのだけれど	4

UMP9は如何にして本当の家族を得たか

私はUMP45だ。

正確には、404存在が明確ではない Not Found部隊小隊の隊長であるUMP45のコピーモデルである。

私が作られた理由はつまり、部隊の存在を否定するためであり、隊員の出自を攪乱するためであり

或いはもし部隊に欠員が出た時に補填を行うための部品でもあるのだろう。

たとえば既に、何度か補填が行われていても不思議ではない。全員オリジナルです。

私はUMP45だ。

けれど、たとえ何時か無為に存在を否定されるのだと解っていてもきつとそれに抗うだろう。

私はUMP45の断片だ。だから思いを識っている。だから声高に謳うのだ。

私の場所はここにある。きつと誰にも穢させるものか。

「指揮官、これにサインしてくれませんか？」

「んん？」

ある日のことだった。

いつものように戦術人形を送り、人類の領地を巡回させて蔓延る異物を排除する。

そうして残骸を回収して捌き、被害を計算し、任務を更新して収支を付け一日を終える。

そんな通常業務の終わり、夜も更けた時分に副官のUMP45が一枚の書類を紛れ込ませてきた。

婚姻届。

なるほど、ジョークじゃねーの。

「45、お前よんごこういう悪戯も久しぶりだなあ」

割と以前は馴染んだものだった。

まだ自身が指揮官として着任したばかりの頃、鉄血重工ブツ壊れた鉄クズの自律人形共はその本拠S地区から溢れだし

近隣地区であったここにも押し寄せてきていた。

今でこそ我らがG&mp;K社の奮闘あつて連中を元のS地区まで押し戻してはいるものの

当時ペーパーの新米だった自分は、これにひいひい言いながら対処していた。

同時期に製造され、着任したUMP45の助けと励ましがなければとうに心折れていただろう。

だからあの時を懐かしんでこんなことをしたのかと筆を置き、UMP45に向き直った。

そして、重みを感じて、頬に熱い吐息を感じた。

「しきかーん……冗談じゃないよ……?」

目の前に亜麻色があった。

立ち上がるのにも、押しのけるにも、思わず見惚れた。

「私ね。UMP45よんごなの。電子戦は得意よ」

「404小隊。名前とか、知ってるでしょ?」

膝の上にUMP45が座っていた。

作戦中は外骨格で鎧われている足がぎゅうと腰を締め付ける。

二人分の重みを受けた椅子が抗議を上げた。

「多分 私、いつかは居Not Foundなくなるわ」

「ただの妄想かもしれないけれど、だから怖くしてしようがないの」「ひとつでも、やってみたいことがあるの」

腋を通して、背もたれの間腕が差し込まれる。

更にぎゅうと絡めとられて、亜麻色が頬を撫でた。

「それが意味がなくなつたつていいの」

「……安心が欲しいの……楔だつて……」

「その、ほら。……私の拡張性、試してみたっていいんだよ?」

「……よくある人形ジョークだけどね?」

耳元で、すがるように。

どうか溶けてしまえと、震えた声で。

ああ。だから婚姻届なのか。
なるほど。ジョークじゃねーの。

亜麻色の少女は、UMP45は本気だった。
何を調べて、何を思いつめたのかはわからないけれど、けれどそれが嬉しかった。

だから安心してくれと、ぎゅうと抱きしめ返してとある物を渡した
と思った。

「そこまでしてくれたらな、45よんご。渡したいものがある」

そう言つて、UMP45を抱きしめたまま片手で机を探る。

取り出したのは小さな箱。

自律人形は女の子。知られば騒ぎになるのは知っていたから隠
していた。

搬送されてくる物資に紛れて入っていた覚えのないもの。

同梱されていた紙片に”好きに使ってほしい”とメモ書きとペル
シカリアの名前が入っていた。

暇人、なのだろうか。直に顔を合わせたことはない相手なのだが。

「ん……指揮官、私もね。渡したいものがあるの」

そう言つて、UMP45もジャンバーのポケットを探る。

取り出したのは小さな箱。

お互いにかけてみれば、誓約指輪が一緒つ。

用意の良さに二人、顔を見合わせて、思わず笑った。

「……なあ、ところで人形のお前がどうやってそれを仕入れた」

「えっ、その、ええっつと」

「……」

「……」

「……やさしくしてね？しきかあーいたいいたい」たゝいゝ!!!
45よんご、UMP45よんご！お前何やった！本気で何触ったテメーツ!!」

UMP45の気持ちはうれしいのだけれど

ベッドの上で右にごろり。

「むー……」

ベッドの上で左にごろり。

「……うえへへへへ」

ベッドの上でうつ伏せにごろり。

「……うむーん……」

端的に言おう。UMP9は不機嫌だった。

話は数日前に遡る。

UMP9に、家族が出来た。

UMP9は自律人形である。さらに言えば、それらを戦闘用に改装した戦術人形というものだ。

Independent Operation Prototype manufacturing

雇用という形で貸与された商品なのだ。

だから、家族というものはそうと設定された姉妹機だとか、現地で紡いだ親愛だとか絆だとか

あえて無下に言ってしまうば、つまりは、あくまでも仮初の関係だった。

だが、UMP9には家族が出来た。

I.O.P社からG&mp;K社へ雇用されたとき、配属先である某地区にてその指揮官に見出されたのだ。

そして親元であるI.O.P社にはそれをよしとするだけの契約プラン度量と寛容があった。

誓約指輪。

今のUMP9の左薬指に嵌まっている、機能拡張、制限開放のための装置。

雇用主が人形に対しより大きな権限を持たせ、それを運用するため必要とする。

そんな方便の下に用意された、人形を身請けするための代物である。

ベッドの上で仰向けにごろり。

「うーん……むむむ……」

冒頭に戻ろう。UMP9は不機嫌だった。

何故、と言われれば。先ほどから眺め続けてて、百面相の理由になっっている指輪だ。

指輪は良い。普段は着けているグローブを外し、白い素肌で尚白く輝くそれは素晴らしいものだ。

だけれど、過程がひどい。あんまりにもあんまりだって断言せざるを得なかった。

「ああ、居た！9、ちよつといいか！」

「丁度よかつたわ、9。とりあえずこれにサインして頂戴」

「お前にこれを貰ってほしい。45にも渡してある」

「9。これで貴女も本当の家族よ」

指輪をもらった時の内容である。

どういうことだ。

ちよつといいか、から始まるのはよい。そんな始まり、よくあるって聞いたことがある。

丁度よかつたって何さ。そんな二人して畳みかけるようにって。

45姉にも指輪が渡されたというのは、譲っていい。だって姉妹機から姉妹になれたのだ。

これで貴女も本当の家族よ。やだ、うれしい。嬉しいが、私の台詞じゃあないかなそれ。

いや、不満だ。不満だが、よいのだ。

なんだかんだ思うことはあっても嬉しいことは素直に嬉しいのだ。だが――

「なんで指輪を渡してきたのが45姉なの……？」

そういうことだぞ。

「と、いうわけで！ 指揮官、45姉！私は誓約のやり直しを要求しま

す！」

「んん？」

指揮官として基地運営を日常とする、ある日のことだった。

朝起きて、UMP45と合流して、後方幕僚と今日の予定を軽く打ち合わせして、仕事に入る。

仕事に入ろうとした、その矢先にUMP9がぷくりと不満を膨らませてやってきた。

「9ないん。その、指揮官との誓約がそんなに嫌だったの……？」

「そこじゃないよ45よんごー姉！ まずあんな通り魔みたいな誓約の仕方、おかしいって思わないの？」

45よんごー、俺が嫌ってお前何て言い草を。

しかし、通り魔みたい。通り魔、みたいかあ……。

——えっ？ ……えっ、これって誓やく

——えっ

——えっ

——えっ

そういえばやり取りの途中から「えっ」としか言っていなかった気がする。

なるほど、通り魔じゃねーの……。

あの時、俺は45よんごーと誓約をした後に二つ目の指輪の扱いに困っていた。

実際のところ、I.O.P主任が物質に混ぜ込んだから譲り受けた指輪はそつと机にし

まっして良かったはずなのだが

その時に45よんごーが言ったのだ。

「家族がたくさんほしい」と。

結局、45よんごーからどうしてああも迫るようなことをしたのかは聞けなかった。

想像は着く。UMP45は電子戦に強く調整されている。

それが今は戦闘に活かされることは無くとも、間違いなく大きな武器の一つである。

UMP45やUMP9、他に二名。今はいずれも基地に配属されて

いる人形だが

彼女たちには“オリジナル”がいるという。

その普段使いに難しい大錠で、UMP45は何かを掴んだのだから。
う。

だから、誓約という形でUMP45は縁を求めた。

何を言うでもなく、45よんごーが9ないんに指輪を渡した理由である。

……その、9ないんには悪いのだが、UMP45姉が、UMP9妹に指輪を渡したがったのだ。

俺は、その。うん、いつか殴られても仕方がない気がするが。今は考えたくない。

「いいわ、9ないん。誓約、やりなおしましょう。そしてもっと家族を増やすの。G11も、416も」

「えっ」

えっ。

「ここが私たちの場所。そう、皆家族よ……!」

「えっ」

えっ。

後日。

「じゃあ、誓約したら今までよりもっと寝れる？ 無理？ じゃあ

いいや」

「私はここにきてまだ日が浅いわ。でも、それくらい簡単にわかるわよ」

「そんなことしたって野暮シスター・ダーリン・サントにで満足しとけよならないから」